

アルパック ニュースレター

迎 春

平成6年元旦



京都府丹波町の「ビジョン・ダンマーク」が竣工しました
 (本文中に関連記事があります)

アルパック ニュースレター もくじ

1994年1月1日

- ・あけましておめでとうございます…………… 2
- ・『エメックス93』の取材セッションに参加して …… 8
- ・第3回日米草の根サミット大会報告…………… 10
- ・「関西まちづくりフォーラム」の紹介…………… 12
- ・まちかど…………… 13

NO. **63**

あけましておめでとうございます。

文化を創る年にキーワードとこころえ

代表取締役会長 三輪 泰司

“国際” “デザイン” “ボランティア” の一年でした。1月早々から京都デザイン関連団体協議会の皆さんに準備に掛かって頂き、3月に「地域デザイン会議'93」を開催。11月の「京都/ACCD国際デザイン・コンファレンス」に繋がり、今年、春から秋にかけて「京都国際デザイン祭」へと夢が広がります。5月には、メルボルンの国際ロータリー世界大会前の青少年交換役員会議で各国の旧友に会いましたが、11月、名古屋での日米草の根交流サミットでもボランティアの姿を体験しました。

シンク・グローバリー

今年は「平安建都1200年」の記念の年です。

これをただ京都の都市づくり史の通過儀礼でなく、21世紀へ向けて日本の文化・文明を見直す機会にしたいと願っています。

21世紀はアジア・太平洋の時代になるのでしょうか。ACCDがアジア・センターを京都に決めたのも、勢づく東アジアの中であって、日本の特異な位置を見たのでしょうか。

五全総や近畿の計画も、日本列島の外から見て行かないとたてられないでしょう。

アクト・ローカリー

関西学研都市でもお祭が開かれます。これも地元の町や村づくりの機会になればと思います。バブル崩壊は、落ち着いて、地道に地域づくりを進め“文化”にしてゆく好機を与えてくれました。私達の本領が発揮できます。各事務所間と社員個人間の活発なコミュニケーションと強力な技術力で、多彩なチーム・プレーを展開するつもりです。今年もよろしく、お願い申し上げます。

まちづくりの推進に力を入れます

代表取締役社長 金井 高造

旧年中は何かとお世話になり、改めてお礼申し上げますとともに、新年のご挨拶を申し上げます。

何と申しましても、昨年は経済環境をはじめ、時代の変動の波にもまれた年であったと思います。この中で、昨年は業務の質の向上と情報発信・交流を重視して取り組んでまいりました。

所内では本社企画推進部の体制を更に強化し、技術の情報交流を図る新しい所内情報誌を発刊し、技術の研磨と普及に取り組んでいます。

本年は所内での蓄積を技術情報誌として所外へも発表していくことを考えております。

また、地域情報交流センターを目指し、各種の研究会やフォーラムを引き続き展開します。皆様の御参加、御指導の程よろしく願い申し上げます。

社会経済環境の厳しい中でのスタートですが、このような時代こそ、一層の質の強化をはかるべきときと痛感しています。このため、教育研修の強化充実と皆様のご協力によるネットワークの下に、まちづくりの具体的な提案や推進に向けて、所員一同一致協力し、まちづくりのキーマンとしての技能を備えたプランナーを目指して頑張りたいと思います。

平成6年はバブル経済のはじけた企業決算が自治体財政を直撃する厳しい予算編成の中ですが、地域づくりは一休みも許されません。私共は正面から問題解決に取り組み、その役割を少しでも果たしたいと願っています。

皆様の益々の御健勝と御活躍を祈りますとともに、本年もよろしくご指導の程、重ねてお願い申し上げます。

パラダイム転換への積極的対応をめざして

京都事務所長 山口 繁雄

欧米へのキャッチアップをほぼ終え成熟化社会に到達したかに見えた我が国経済社会は、バブル経済が崩壊して、今まさに時代的なパラダイムの転換期を迎えています。

さしもの京都も、そうした時代的变化に少なからぬ影響を受けており、従来の枠組みを越えた思考や取組みが行われてきています。

例えば、京都市では、京都の問題を考える場合、従来ですと京都市内、それも「洛中」に着目する傾向が強かったのですが、昨年あたりからはかなり変化して、『京都市圏』という広い枠内で考えてみようという取組みを行っています。また、京都府でも、府下の地域別構想の具体化に向けた取組以外に、「環日本海時代」に向けた広域的取組みを強めています。

この他にも、新たな時代に向けた産業経済基盤のあり方をさぐる産業ビジョンづくりや長寿社会における福祉施策や生涯学習施策等の模索等、多様な取組みが行われています。

こうした動きは、行政ばかりでなく経済界においても活発で、例えば京都経済同友会では、「21世紀・京都プロジェクト」や「北近畿ルネッサンス」「京滋奈地域活性化」等の研究活動を開始し、新しい時代におけるそれぞれの地域の活性化方策を探りはじめています。

近年、パラダイム転換の代表的なキーワードとして、「成熟化」「高齢化」「国際化」という言葉が使われてきましたが、京都をめぐる動きもまさにそのキーワードを軸に展開してきています。

狂乱のバブル経済状況が終焉して、我が国の経済社会は少し元気をなくしていますが、こうした時期だからこそいよいよ腰を据えて

真に豊かな「生活大国」づくりに取りかからなければならないと心を新たにしています。

そのための新しい課題の確認と新しい提案内容について研究を進め、新時代に対応し得る施策提案力をつけたいと考えています。

ところで、「国際化」に関連して、今号の表紙を飾っている『ビジョン・ダンマーク』は、92年のセビリア万博に出展したデンマーク館で、京都府丹波町がデンマーク王国との国際交流のシンボル施設として、同町に移設したものです。

このデンマーク館の移設にあたっては、私共も一部お手伝いをさせていただきましたが、なにしろ『基準』の異なる国からの建築物の移設とあって、大変に苦労しました。

改めて、「国際交流」を具体的に進める場合の問題を体験させていただくことになりましたが、歴史的に見てもパラダイム転換時の対応には、こうした苦労はつきもののようなのです。

本年も所員一同頑張ります。どうかよろしくお願ひ申し上げます。

人間発達とまちづくり新時代

大阪事務所長 杉原 五郎

11月上旬の秋晴れの日でした。1日休暇をとって福井まで出かけました。福井放送の「人間ネットワーク」という30分番組に出演するためです。テーマは、敦賀の活性化について語る、対談の相手は敦賀駅前商店街青年部代表の上山さんと、相手も私もテレビにでるのは初めて。ディレクター氏とともにコーヒーを飲みながら30分ほど簡単な打ち合わせをした後、すぐ録画撮りに入りました。湖西線の永原～敦賀間を直流化して新快速を敦賀まで走らせる、そのために商店街の活性化や敦賀港の魅力化をめざしたまちづくりを推進

あけましておめでとうございます。

していこう、というのが対談の基本ストーリー。事前に用意していたメモが本番では役に立たずアドリブでまちづくりに対する思いを語りました。最初はさすがに緊張しましたが、だんだんと調子に乗ってきて、話題が敦賀港の再開発に移るあたりでは、サンフランシスコや小樽の事例なども交えて言いたい放題といった感じとなりました。

あわただしく過ぎ去った1993年は、私にとっても、大阪事務所にとっても「まちづくり」という5文字をかみしめながらの1年でした。7月上旬、世田谷のまちづくりセンターで市民参加のまちづくりやまちづくりファンドについてヒアリングする機会がありました。下旬には、まちづくりワークショップを日本に紹介したヘンリー・サノフ教授（ノースカロライナ州立大学）に逢うために神戸大学まで足を運びました。10月には、5月頃から準備を進めてきた「関西まちづくりフォーラム」をNPO（非営利組織）として有志7名が世話役となって設立し、活動を開始しました。11月下旬には、鳥取大学時代から智頭のまちづくり（CCPT）と深い係わりを持っておられる岡田先生（京都大学教授）のお誘いで、鳥取県智頭町で開かれた「杉下村塾」に講師として参加し、東京・大阪・岡山・広島や地元鳥取から集まった地域リーダーの方々と交流を深めました。

いま、まちづくりの新しい波が押し寄せてきていることを実感しています。人々は、人間として、住み、働き、憩い、創造し、交流することに強い欲求を持っています。「まちづくり新時代」といっていい状況にあると思います。同時に、「人間発達」がこれからのまちづくりのキーワードになると確信しています。

アルパックの大阪事務所も、人間と自然（地球）、人間と都市、人間と人間との係わ

りを大切にしながら、まちづくりの豊かな発展をめざして努力していきたいと考えております。引き続き、ご指導とご支援をよろしくお願い致します。

新たな時代創造精神の構築をめざして

名古屋事務所長 尾関 利勝

アルパック応援団の皆様には、昨年もひとかたならぬご指導・ご協力を賜り、ありがとうございました。紙面で失礼ながら、新年のごあいさつとともに、厚く御礼を申し上げます。

先行き不透明な状況が長引いています。こういう時代だからこそ、様々な地域の問題に対応する確かな理念と現実的な英知が求められていると痛感します。

自力と他力の判断がつきにくかったバブルの最中では、自力のまちづくりへの発想は、ほとんど力の無いささやきでしかありませんでしたが、バブル崩壊に引き続く不況の長期化と自治体財政悪化の中で、にわかに表立って来ました。残念ながら、事ここに至っても自力の発想がまだ十分な市民権を得てはいません。自力の発想は他力を否定するものではなく、言い替えれば、確かな自力の努力のあるところにしか、他力については来ないという意味を含んでいます。棚ボタが運ではなく、努力の結果が運であると以前申したことがあります。いたずらに時の流れに流されず、かと言って逆らわず、ひたすらに目標へ向かう信念と泳ぎきる努力が、この時代だからこそ大切だと感じています。

21世紀を7年後に控え、今一度、20世紀の足跡を振り返り、その成果を再認識して新たな世紀へのパラダイムを明確にすることが必要だと思います。混迷した文化状況の世紀末ではなく、次世代への展望を明確にするため

今年もよろしくお願ひ致します。

の温故知新・すなわち20世紀のルネッサンスがこの世紀末の課題です。近代化の足跡は、時代の転換を察知した先駆的起業家精神に誘導され、伝統を踏み台にした技術移転を契機として独自領域へ到達する創造原理を証明しています。それは戦後の復興期でも、オイルショックを乗り切った経緯からも明白です。ただし、明治以来戦後の復興までの近代化の過程では、とりわけ生活・産業・経済の領域で、西欧と言うトレードの外的対象が明確でしたが、この10年程はトレードの対象を自らの内に見出さなければならぬ状況に、日本も地域も置かれてきています。もちろんまだまだ文化・福祉の領域など世界からトレードする対象は多く残っています。手本が外に無い時、内に見出す努力が必要な現代は、近代化を上回る時代の転換意識が必要でしょう。

近ごろ、まちづくりの現場で「夢と危機を認識し、それを結ぶストーリーを考えよう」と訴えています。先行きが見えにくい時代ですが、だからこそ、その危機と夢を正しく認識することが21世紀へのパラダイムを描く基本だろうと思います。今しばらく、自治体財政をはじめ厳しい経済環境が続くことと予想しています。流されず、かと言って逆らわず、地域の未来のために、確かにしたたかに努力し続ける所存です。本年もよろしくご指導、ご協力をお願い申し上げます。

<p>高齢者福祉と「浦島太郎」</p>

<p>東京事務所長 小林 祐造</p>

「浦島太郎」とはなんだか知っていますか？
 そうです、竜宮城にいった帰って見ると周りは知らない人ばかり、もらった玉手箱開けてびっくりおじいさん、その人です。

私達は今高齢者福祉に取り組んでいますが、

いかんせん、高齢者については何も知らなかったということです。どのような人を高齢者といい、生活時間や生活習慣はどうなっているのか、高齢者が自立して生活していくためのバックアップとして何が必要なのか、全てに対して？や！ばかりでした。

アルパックの仕事のやり方として「知らなければ知ればいい」との考え方があります。そこで高齢者が住んでおられる住宅にお邪魔して生活を実態調査したり、直接高齢者と接することができるように特別養護老人ホームに一日入園したり、多くの方々に対してもヒアリングをしながら数々のことを教えてもらいました。

知識は得ることができましたが、どうしても生活実感として解りません。どうして段差がいけないのか、理解はできますが、実感がわいてこないのです。どうして手摺があるのか、手にそれが伝わってきません。実感が伝わってこないままに国が進めているシルバーハウジング・プロジェクト事業計画及び推進計画の委員会をしていても何かを忘れているようで仕方ありませんでした。

高齢者を体験できるグッズ

高齢者の疑似体験はアメリカでは20年も前から心理学や建築学（ミシガン大学）、老年学の分野で研究されてきています。日本でもWAC（長寿社会文化協会）から委託を受け、アルパックのネットワーク会社である（備服部）メディカル研究所が開発した、高齢者疑似体験グッズが「うらしま太郎」なのです。

少し内容を説明しますと、セットは12点で、老眼になり、目の焦点距離が遠くなり、白内障で色の見え方が変化し、ぼやけて見えることを再現する眼鏡（白内障と視野狭痺になった状態）をはじめ、高い音が聞きづらくなる耳栓、足のつま先が上がりにくく手足の関節

あげましておめでとうございます。

の動きがにぶくなることを再現するサポーター、筋力の低下に対してはチョッキのポケットに鉛を入れる等私達の周辺で簡単に手に入るものを基本に考えられてますが、ここまでするには、数限りない高齢者に聞き何度も微調整をしながら作るのですが、確かめるのが大変だったそうです。(写真は所員がグッズを付け、暮れ始めた街を実際に歩いて体験した時のいで立ちです)

体験を通して

実際の老化は長い年月をかけて徐々にそして確実に進むものであり、身体も生活も老化とつきあいながら慣れていきますが、疑似体験をしてみるとよくわかります。

お年寄りがなぜ自分本位に歩くのか「歩くことに一生懸命」「おとしよりの動きにくさがよくわかり」「一声かけて行動すると安心でき」「相手のペースに合わせることが必要だと実感でき」そして、不便さだけでなく、孤独な気持ち、引っ込み思案等になってしまうことも感じとることができます。

よく福祉は「心」だと言われますが、アルパックの携わっている仕事の多くは「うらしま太郎」に通じるものがあります。福祉を担当している人からよく聞かされますが、「福祉行政はいつも後追い行政、メニューを用意して待っているのではダメなんです、まず取り組みなければ、その後から福祉行政がついてくるのですから」

今年もまたこのことを考えながら仕事に取り組んでいきたいと考えております。



チャレンジ精神と好奇心のある
事務所を目指して
九州地域計画研究所副所長 山田 龍雄

昨年は冷夏で「米」の緊急輸入を行うなど、大変な年であったに違いなく、昔であれば、大飢饉で数万人の餓死者が出ていてもおかしくないことであったと思われます。

しかし、今は「米」でない「おかず」が豊かな時代であるためか、全く食糧難といった実感がなく、不況風が吹いている中でも日本は本当に物質的には豊かになったのだと思う反面、自分自身の本当の豊かさを求めることが益々重要視されることになると思われます。

また、全国で「何々村」といったものがまだいくつ建設されていますが、円高を反映して各旅行会社では格安海外旅行企画(例えばパリ一週間11万円台)を多く出しており、今後外国をテーマにした「何々村」は、これらの格安旅行企画とどのように対抗していくのか厳しい時代にあるように感じます。

このような様々な時代の気配を感じながら九州事務所も新たな年を迎えることとなりましたが、業務の方も北部九州研究学園都市構想関連、住宅関連、再開発関連、事業企画関連、地域活性化ビジョンづくりなど徐々にではありますが毎年幅が広がってきています。

今年の4月から新入所員が1名増える予定であり、より一段と機動力を発揮できるものと考えています。また、チャレンジ精神と好奇心のあふれる事務所を目指していきたいと考えています。

そこで、今年の行事として次のようなことを続けていければと思います。

- ①うまいものを食べるパーティ
- ②九州を「もっと知ろう」研修旅行
- ③アジア視察旅行

1994年もよろしく申し上げます。

初心を踏まえ飛躍を目指します

(株)アルパックインターナショナル 代表 霜田 稔

昨年の4月から、アルパックの支援をえてアルパック大阪事務所内に移転し、二歩後退、一歩前進のもとに、体制を整えて、総合計画策定、都市計画の用途指定等の基礎的な計画業務に全力を注ぎながら、学研都市のアカデミアプランや新条里都市等の提案づくりをお手伝いしてきました。

現在、経済不況の中で、大規模な都市開発等が低迷しつつありますが、高齢化社会に向けた地域福祉、町の美化、緑化、ごみ減量活動、さらには、文化会館や運動施設等のハードな施設を活用する文化、スポーツ、生涯教育活動の自主的住民活動の盛り上がり等は、今後のまちづくりに不可欠な条件であることがはっきりしてきました。不況の時代における住民の自主的で意欲的な活動の展開こそが、本当の生活大国の底力であると思います。住民の支持と主体的参加を可能とする夢のある豊かな計画づくりこそ、個性あるまちづくりの原点であると思います。この不況の時をうまくいかし、次の時代に向けてまちづくりをいかに進めるかが私達に問われていると思います。いままで近代化の掛け声のもとに無視してきた身近な地域の自治会組織を再度見直していくことも重要であると思います。地方分権の底力には、この自治会組織の法人化を含めた活性化があるのではないのでしょうか。日本の貧しい都市計画を克服していく道は、意外とこの日本的なコミュニティの活性化・再生にあると思います。

今年も経済的にも精神的にも厳しい年だと思いますが、皆様の健康を祈願しながら、合わせて、今年も宜しくご指導下さいますようお願いいたします。

新しい社会への転換の時代に

(株)都市居住文化研究所

代表 道家 駿太郎

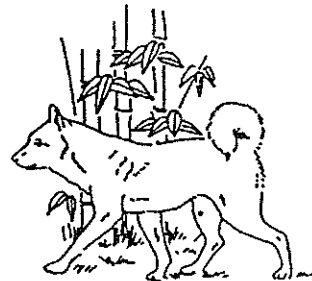
新年早々ですが、あい変わらず戦後最長の不況の真っ只中で、出口がまだ見えて来ない様です。しかしこの不況も別の面から見れば日本経済の構造的転換期のきしみとも言えます。

高度経済成長から低成長への転換をオイルショックをへて、いよいよ成長の概念から脱皮し、フロー型からストック型の豊かな社会への入口に踏み込んだ証とも言えなくはないでしょうか。

こんな社会では改めて京都の持つ伝統的な物づくりの視点や暮らし方が浮上ります。使い捨て社会から長持ち型社会へ向けて、本年も着実にまちづくり、暮らしづくりへ歩を進めていきたいと考えております。

本年は、職住一体の定住型住環境整備や高齢者介護施設にも関わり、ハード・ソフト・ヒューマンを基本に実践的なまちづくりに取り組んでいきたいと考えています。

今後とも、みなさま方のご指導の程よろしくお願ひします。



『エメックス93』のポスターセッションに参加して

原田 弘之

「エメックス93」とは、第2回世界閉鎖性海域環境保全会議(EMECS:The Environmental Management of Enclosed Coastal Seas)のことです。その第1回は1990年に神戸市で行われました。もともとこの会議は、瀬戸内海環境保全知事・市長会議が中心になって、閉鎖性海域の環境問題の解決に向け、世界レベルでその地域の関係者の連携を深めるために開かれたものです。

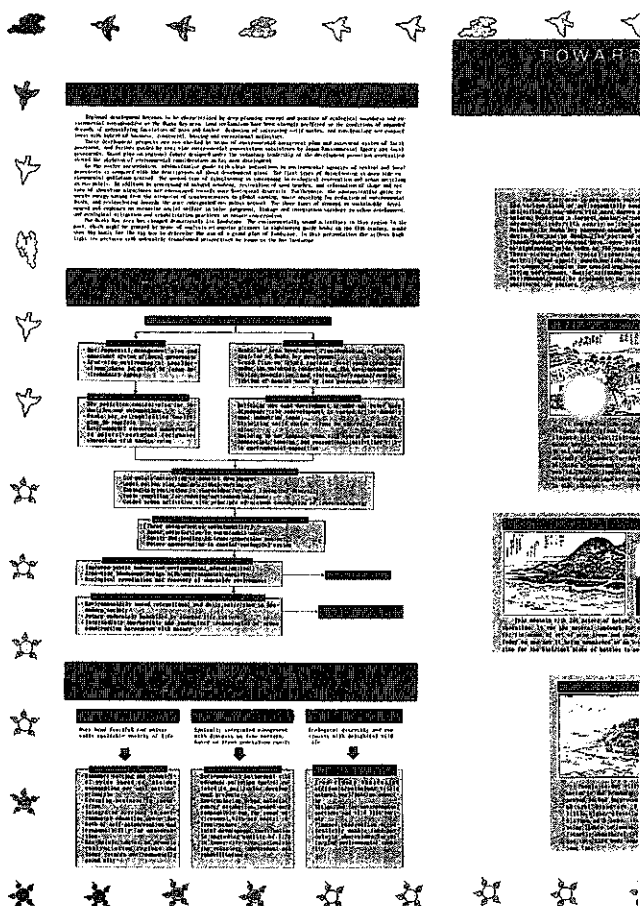
今回の第2回は1993年の11月10日から4日間、北米の代表的な閉鎖性海域であるチェサピーク湾に面したボルチモア市で1,000人以上の市民、行政、研究者などを迎えて開催されました。会議の内容は「理念と政策」「住民参加」など6テーマの分科会での研究発表、パネルディスカッション等の全体会議などがあり、日本からも40人以上が研究発表やポスターセッションに参加しました。

私はこの会議自体には参加しなかったのですが、大阪大学の盛岡通教授とともにポスターセッションのポスター作成を行いました。近世の名所図会を用いたプレゼンテーション発表したポスターの題名は「環境配慮型の大阪湾の開発・整備に向けて」で、持続可能な湾岸域開発のコンセプトの提示と、ソフト、ハードを含めた具体的な技術(エコ・テクノロジー)の提案を行っています。

プレゼンテーション上の最大の特徴は、ポスターの中心部分にあるように、「名所図会」の挿し絵を用いたことです。名所図会とは近世に庶民の間で流行した観光ガイドブックのことで、全国各地の名所を挿し絵を使って紹介したものです。国際会議で、しかも開催地が比較的歴史の浅いアメリカということで、

日本のビジュアルな歴史資料を示し、少しでも日本的なものを伝えることをねらいました。

今回はこの中から当時の大阪湾の姿を象徴するような挿し絵を10枚選び、環境配慮上参考になる点を紹介するかたちで掲載しました。また一部現代の写真も併せて載せ、昔と今を比較できるような工夫も行いました。例えば、天保山は近世に河川浚渫の土砂により造成された標高18mの人造山ですが、海上からのランドマーク、大阪湾を眺望する視点場、そして花見や舟遊びができる遊興地などの機能が



複合された開発といえます。一方、現在はレクリ・商業機能をもつ天保山ハーバービレッジにとって代わっています。この昔と今の姿をポスターを見る人に比較してもらいました。月・太陽・鳥・魚のイラスト

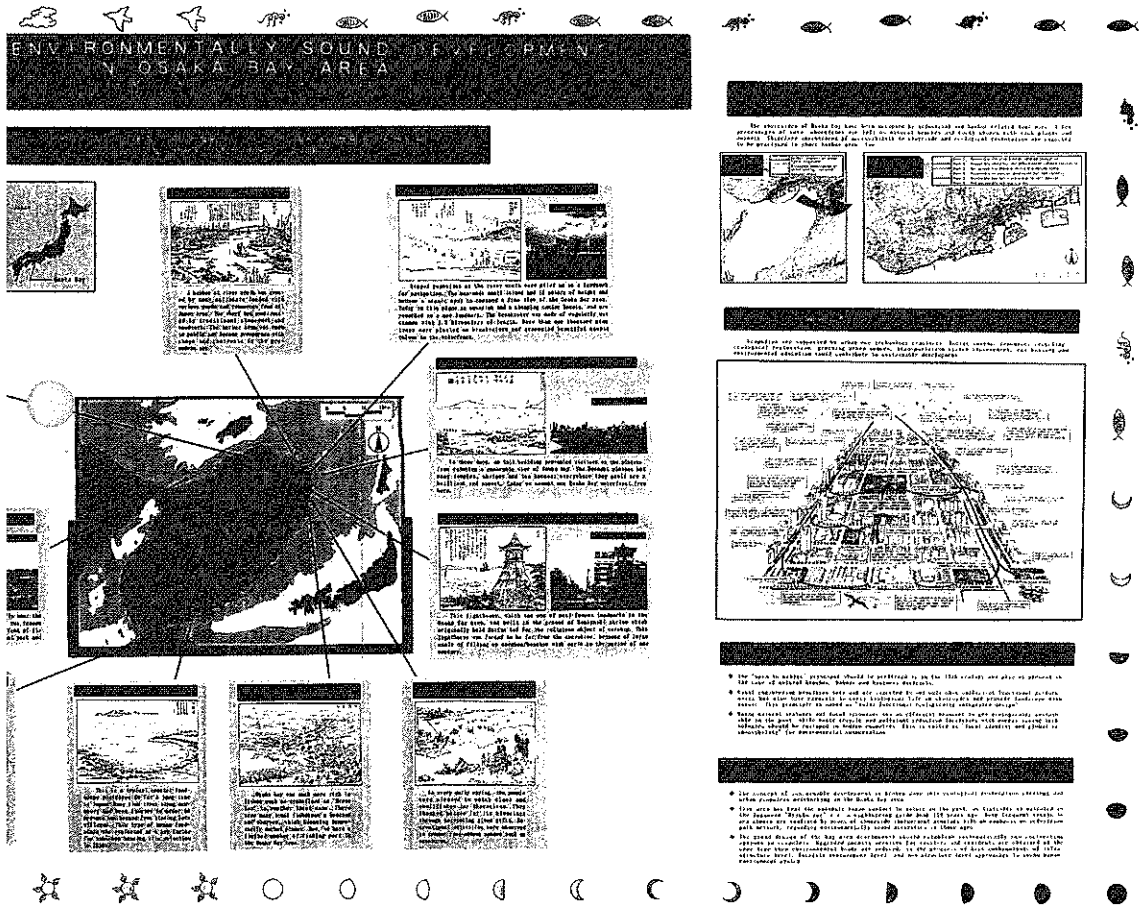
プレゼンテーション上で工夫したもう一つの点は、もともとデザイナーの方にアドバイスを受けたのですが、ポスターの四周に月・太陽・鳥・魚のイラストを配したことです。白黒の図ではわかりませんが、色彩的には左右上下で寒暖色と濃淡のグラデーションを行っています。これらのイラストは、もちろん湾岸域という主題に関連させたものですが、先の名所図会による日本的なものの主張とは

逆に、おそらく全世界の人が理解できるモチーフであり、ポスターに親しみをもってもらうことなどをねらいました。

世界への日本オリジナルの情報発信の重要性

この会議に参加した共同作成者の盛岡先生は「残念ながら、日本の湾岸域における環境保全への取り組みは外国にはほとんど理解されていない」と実感をもって語っておられました。今後このような世界レベルでのコミュニケーションの場が増えていくでしょうが、このポスター作成に関わって、日本のオリジナルな情報と、その情報の発信手段を持つことの大切さが少しわかったような気がします。

(大阪事務所 はらだ ひろゆき)



ポスターセッションへ発表したポスター

第3回日米草の根交流サミット大会報告

— 名古屋事務局を担当して —

小竹 暢隆

昨年11月11日（木）～15日（月）、東京、名古屋、京都にて、（財）ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターの主催で、第3回日米草の根交流サミット大会が開催された。第1回は京都、第2回はボストン、そして第3回は名古屋が本会場となった。

名古屋でのプログラムは12日（金）の歴史施設・伝統産業・学校などをバスで巡りながら交流する草の根交流会、13日（土）の総会（名古屋国際会議場）、14日（日）は日米草の根野球大会（熱田球場）の3日間で、来日（在日を含む）アメリカ人ホームステイプログラムでは、13日、14日の2泊を名古屋の家庭に滞在した。

全体会議の状況

11月13日（土）、名古屋国際会議場で開催された総会（メイン事業）には約1500名の参加があった。午前9時30分の開会式にはすでに会場のセンチュリーホールは1、2階が入り切れない状態になった。続いて「これからの国際交流は時代の変革を担えるか」をテーマに、基調講演、シンポジウムが行われた。

また分科会は15あり、それぞれコーディネーターとスピーカー数名など、全体で約80名を超える講師陣（内アメリカ人約30名）を配し、ライフスタイル、教育、野球文化比較、環境、非営利組織、企業の社会貢献、国際交流の先駆者、神道の精神文化、子供達の夢などユニークなテーマで報告・意見交換がされた。分科会会場は椅子を追加したところもあるほどで、中身についても予定の3時間を大幅に超過して議論されたところもあった。

それぞれの詳しい内容については、現在作成されている報告書に譲るとして、ここでは概況と主として運営面を取り上げる。

草の根野球大会

翌11月14日（日）には、熱田球場で草の根野球大会が開催された。名古屋J.Cチーム、金城学院大学の女子軟式野球チーム、アメリカ人&一般参加者チームなどが参加して親善試合が行なわれた。朝10時の開始時には、ウィリアムスバーグ市長が始球式を行った。元阪神タイガーズのスチーブ・ラム氏を中心とするアメリカ人チームは、女子との試合では全員が利き腕と逆の打席でバッティングするなどハンディをつけたが、持ち前のパワーで逆転勝ちをおさめ、また続くJ.Cとの試合にも逆転勝ちした。試合後のビールの味も最高で、交流も一段と深まった。

開催に至る経緯

一昨年（1992年）6月頃、外務省の友人が「ジョン万次郎の会」事務局長とともに当名古屋事務所を来訪され、今回の日米草の根サミット大会を名古屋で開催してはどうかという打診があった。1991年の京都大会を第1回として日米交互で開催するというので、間近に迫った第2回のボストン大会に内容を把握するために青年会議所のメンバーと参加した。その概要については56号（1992.11.1）で報告したが、市民同士が肩書きを外して交流する「草の根交流」という特に珍しくない用語に、新しい時代の流れを感じることができた。

1992年11月17日に「ジョン万次郎の会」を母体にした（財）ジョン万次郎ホイットフィ



分科会：日米郵便局交流フォーラム



書道家による指導（文化交流）

ールド記念国際草の根交流センターが設立されたが、同じ頃第3回の名古屋開催が正式決定した。

手作りの運営

予算のないところからスタートしていることもあり、専門業者に委託しない手作りの運営を目指して、昨年4月に（社）名古屋青年会議所（JC）新谷岳史理事長を委員長として名古屋運営委員会が設立された。

JCの担当のメンバーを核とし、学生の組織であるアイセックや、名古屋在住のアメリカ人ビジネスマンの集まりであるABCNのメンバー、ボランティア通訳、個人の有志も加わり徐々に組織ができてきた。特に副委員長として活躍いただいた佐藤久美さんという英語雑誌の主宰者のネットワークは大変なものであり、随分恩恵を受けた。

結果として約1500名という参加者があったが、募集については広告媒体に頼ることなく大半が口コミである。いわゆる「動員」も一部あるが、趣旨に賛同したり、何となくおもしろそうだということで参加した人々が大半である。通常国際交流に関われない一般の人々に広く解放し、受付、記録、通訳など様々な分野でボランティアをしながらの参加を呼び掛けた。こうしたボランティアそのものも交流のプロトコルである。

地域における交流の受け皿づくりを意識しながら、地域のボランティアの人々を緩やかに

に組織し、運営主体づくりを行った。

個人をベースとした交流

各地域で様々な「国際交流」事業が行われているが、その内容は職能別交流、すなわち姉妹都市関係者同士の交流、教育者同士の交流、国際交流専門家同士の交流などが中心で、参加者の層が比較的限定されたものが多い。

したがって、日米両国の各界オピニオンリーダーも交え、社会人、学生、あるいは学職者、官僚、企業関係者など、異なる職業、異分野の人々が一緒になった国際交流は比較的珍しい。そうした市民同士が、個人をベースとした草の根交流、すなわち肩書をはずした一個人として、あるいはボランティア・スタッフとして参加し、交流を行うものである。こうした草の根交流においては、個人的体験が重要な交流素材になる。個人あるいは地域には様々はエピソードが内在しており、それらを大切にしながら交流を行うなかで、新たなつながりを発見し、思わぬ発展をもたらすことが珍しくない。

マッチングを配慮した社会人ホームスティ

ホームスティ・プログラムそのものは珍しくないが、その多くは学生を対象としており、社会人、ことにオピニオンリーダーまでを対象としたものは少ない。ただそれだけに実際に行うに当たっては、趣味・嗜好や関心事、健康状態など様々な面から、ホームスティ者とのマッチングにできる限り配慮してホスト

ファミリーを選定した。

学識者には共通の関心分野を持つ大学の教官にお願いしたり、英語の話せない家庭に対しては、丸1日ボランティア通訳に手伝ってもらうなどの手配をした。

15日朝の新幹線のホームでの別れの光景は、オピニオンリーダーの方々であっても同じで、やはり感動的なシーンであった。

大会の評価と今後の方向

参加者の一人であるコンサートホールの運営責任者の感想では、通常、コンサートの評価は帰り際の聴衆の表情で概ね判断できるが、本大会の多くの参加者の表情には満足感が感じとれたという。

それ以上に、草の根交流サミット大会の評価は、一般市民にどれだけ開かれているか、どれだけ組織の肩書をはずして交流できたか、といった視点でなされるべきであろう。オープンなローカリズムの中で草の根カルチャーを育てていくことが重要である。そして、この事業を支えたボランティアは地域の財産であり、緩やかに組織することにより今後の交流事業の受け皿となることが期待される。

その意味で今回のサミット大会は一過性のイベントではなく、ボランティアの活力を生かして行くためにも今後もなんらかの形で事業を継続していく必要がある。

(名古屋事務所 おだけ のぶたか)

「関西まちづくりフォーラム」の紹介

馬場 正哲

今日、情報化、グローバル化、余暇社会の進展などとともに高齢化、定住化など成熟社会の到来を前に、「まちづくり」への期待がとみに高まりを見せています。その中で、まちづくりでの市民・行政・専門家の係わりや役割が重要となりつつあり、その進め方について様々な問いかけや取り組みがなされてきています。しかし、意外に情報が交流していないのが現状です。

このような時代を踏まえ、新しいまちづくりの在り方を交流とネットワークで模索する「関西まちづくりフォーラム」がこの度設立されました。

行政職員など様々の意欲的な人が集ります

この「関西まちづくりフォーラム」は、「まちづくり」に関心を持ち、まちづくりに係わる交流に賛同する個人を主体とする、非営利の任意団体です。参加の対象は、市町村などの行政職員、大学などの研究者、コンサルタント・プランナーや専門家、まちづくり

に関心の高い市民などです。

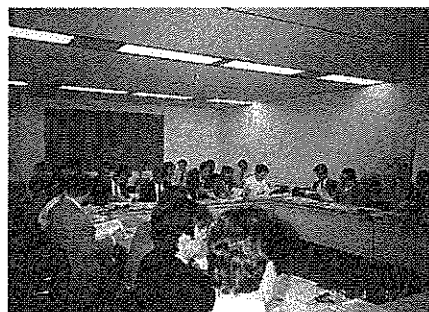
ユニーク事例や「人」に学びます

特にまちづくりの多面的な関わりや立場の交流を重視しながら、関西のユニークなまちづくりの実践報告を軸に、全国や海外のまちづくりに関わる情報交流を活発に行います。また、現地見学会や海外視察、合宿形式の研究交流会なども企画するとともに、報告・討議された内容はまとめていきます。

運営委員会を設けて運営します

まちづくりフォーラムの運営は行政関係者、コンサルタントなど主体的に集まるコアメンバーの「運営委員会」が行います。当面事務局はアルパック大阪事務所に置きます。

(世話役：杉原・馬場・小阪・若林・中室)



平成5年10月8日スタートしました

設立総会に引き続き、第1回フォーラムを、全国でもユニークなまちづくりを進める豊中市政策推進部まちづくり支援室長の芦田英機氏をお招きし「みんなの計画・役所の支援」と題し、条例制定や実践のお話をいただき、フォーラムへの夢を語り合いました。

第2回は11月22日に間野まちづくり研究所所長間野博氏に「民間による木質住宅群の共同建替えについて」門真市朝日町地区カルチェ・ドムールの経験を報告頂き、市側で担当の千住信幸氏を交えて、再開発事業の方法と人間模様などを学びました。

第3回フォーラムが開催されます

今回は、着々と姿を現しつつある「関西化学術研究都市」とそれを受け入れる地元自治体・住民などの状況を、視察やパネルディスカッションなどで学ぶ企画です。終了後、新年の懇親会も行われます。

日時：平成6年1月29日（土）

午後1時30分～5時

場所：けいはんなプラザ

会費：2,000円（懇親会は別）

集合：JR祝園駅前広場（JR・近鉄線）1時
参加ご希望の方はFAXで06-941-7478へお申し込み下さい。

（大阪事務所 ばば まさあき）

ま ち か ど

『ごみスペースの風景』

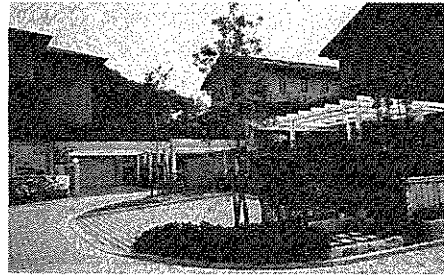
西田 昌治

ごみを各戸収集していない地区では、住宅地内に家庭用ごみ置き場を設置しています。ごみ置き場の形態としては、ごみ収集機能だけを追求し、外周をただネットフェンスで囲った機能追求型から、町並み景観等に配慮し、設置場所や素材を吟味し、出来るだけごみ置き場が目立たないようにした景観重視型まで、さまざまなごみ置き場の形態があり、近年はそのデザインが色々と試行錯誤されています。

私の考えるごみ置き場の風景は、町並みと調和し、一見ごみ置き場であることが分からないオープンな空間が確保できれば良いのではないかと思います（収集日以外は、オープンスペースとして活用する等）。

そこで具体例を事例写真で見てください、今後計画される場合の参考にされればと思います。

（京都事務所 にしだ まさはる）



コモンシティ豊田
石貼のごみスペースと来客用カーポートを植栽で修景



建物のデザインと統一された民間集合住宅の
ボックス型ごみ置場



青山台集合住宅（奈良）
屋根付で景観や天候に配慮している

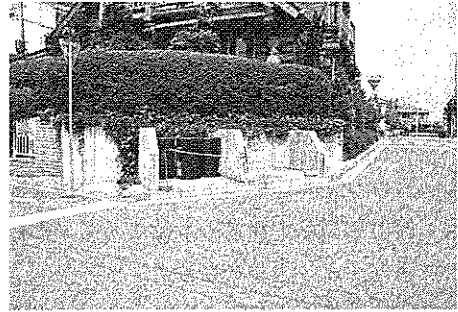
前ページの写真 形態別

本ページの写真 土地利用の種類別

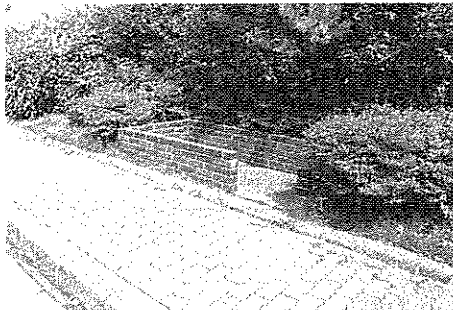
上段・中段 公共用地

下段左側 民地

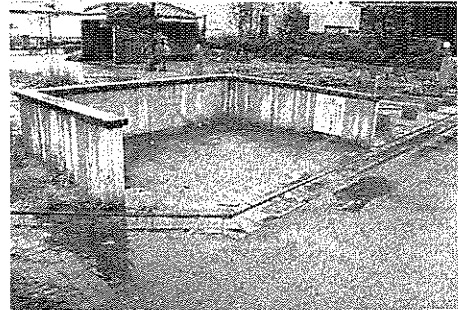
下段右側 公共+地域住民



三田ニュータウン (兵庫県)
隣切り利用型



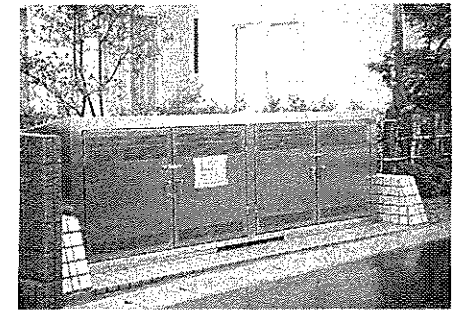
コモンライフ (福岡県新宮町)
歩道植栽帯利用型：焼過ぎレンガブロックで修景



シーサイドもち (福岡市)
ポケットパーク利用型



三田ニュータウン (兵庫県)
宅地切込型でスペース創出、ごみ種別で区分している



御所野ニュータウン (秋田県)
公共でつくったスペースに住民が
ステンレスボックスを自主的に設置した例

アルパック (株)地域計画建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本 社	〒600 京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル 6階)	TEL (075)221-5132(代)
京 都 事 務 所		FAX (075)256-1764
大 阪 事 務 所	〒540 大阪市中央区城見 1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06) 942-5732(代)
		FAX (06) 941-7478
名 古 屋 事 務 所	〒460 名古屋市中区丸の内 3丁目18番30号 (ツボウチビル 2階)	TEL (052)962-1224(代)
		FAX (052)962-1225
東 京 事 務 所	〒180 東京都新宿区新宿 2-5-16 (露ビル401号)	TEL (03) 3226-9130(代)
		FAX (03) 3226-9560
㈱九州地域計画 研 究 所	〒810 福岡市中央区天神 1丁目15番1号 (日之出ビル 6階)	TEL (092) 731-7671(代)
		FAX (092) 731-7673
㈱アルパックイン ターナショナル	〒540 大阪市中央区城見 1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06) 965-2012(代)
		FAX (06) 965-2014
㈱都市居住文化 研 究 所	〒604 京都市中京区東洞院通六角上ル 三文字町225 (朝陽ビル 4階)	TEL (075)252-2231
		FAX (075)252-4417